# “SPRITE” by SAYO NAGASE

## 永瀬沙世×米山菜津子 対談
## 「導き手のいない新しい場所に足を踏み入れたときの瞬間を描きたかった」

photo: Takehiro Goto
interview & text: Chiho Inoue

16 07/13 UPDATE

写真家・永瀬沙世が2年ぶりとなる個展「SPRITE」を開催、同名の写真集を発売した。砂浜に浮遊する紫の未確認生命体、闇夜に浮かび上がる女性の影。超常現象ともとれるイメージの連なりは、観るものに驚きと不安感を与えながらも、不思議と心を満たしていき、自然の声に耳を傾けて前に進もうという力をくれる。今回は写真集のデザインを手がけた米山菜津子とともに、この衝撃の最新作の制作秘話を語ってもらった。

——『SPRITE』はかなりユニークな作品ですね。どんなきっかけでこの写真集を出そうと思ったんでしょうか。

永瀬（以下N）「いまいちばん最優先の作品はこれだなと思いました。実は発表に至るまで5〜6年かかったのですが、今回の作品は理解しやすいものではないから、積極的に人に見せてはいなくて。なかなか形になりづらいこの作品を表に出すには、自分で発信するしかないかなって」

米山（以下Y）「初めてこのシリーズの写真を見せてもらったとき、『すごいものを見てしまった……』と衝撃を受けて。写真集にしたいから編集とデザインを任せたいと沙世さんから頼まれて、ともかく最初に受け取ったエネルギーの塊みたいなものをそのまま本にしようと思いました。数枚で見るのと、たくさんの枚数で見るのとでは受ける印

し込みにかける期間がすごく長かった。街や森を散歩したり、ご飯を食べたり、お風呂に入ったりしているとき、何もしていないように見えて実はずっとそのことばかり考え

象がすごく違う作品だから、なるべく全部見せたい！ と」

N「わかってくれて嬉しかったです。クライアントワーク的に考えると、わかりやすさやキーワードを内包する象徴的な1枚でいい。でも作品ってもっと言語化しづらいものだから」

Y「共同作業としては今回が初めてなのに、並び順も任せてもらえて」

——例えば表紙の写真は、砂浜で遺跡のようなものを作っていますが、どのくらいかけて撮影したんですか？

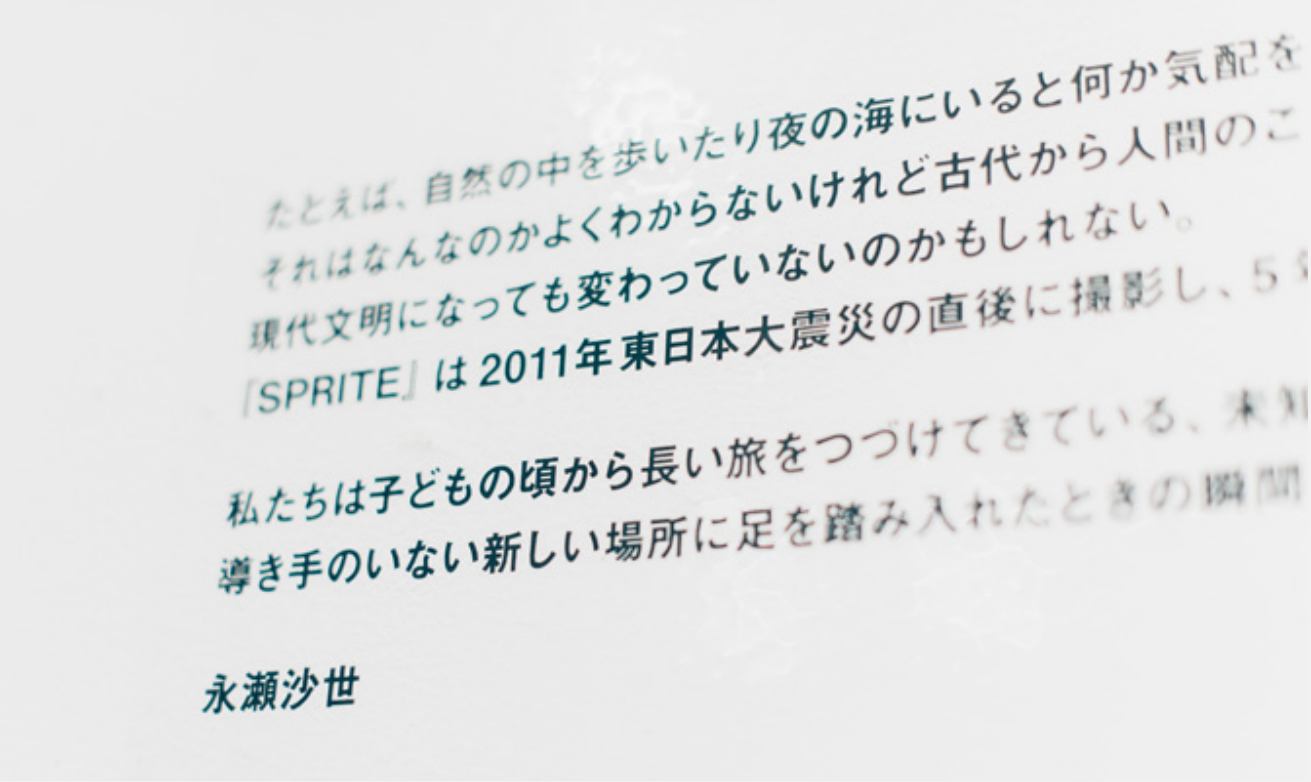
N「撮影自体は全部で数日ですが、構想とテーマへの落とし込みに時間がかかっていて」

——まず撮りたいイメージが湧くんですか？

N「そもそも人間の頭の中に湧いてくるものは自然を超えるまでのものじゃないと思っているんです。だから撮る中で何か“ひっかかるもの”が出てきて、今度はその周辺を撮って、そこに浮き出てきたものの周辺をまた撮っていく。それを繰り返していくと浮き出てくる」

Y「これの種が生まれ始めたのはいつ頃だったんですか？」

N「震災の後、全部仕事がキャンセルになったときに時間ができて、うろうろしていたときにずっと考えてた」




——確かにあの頃、私たちが立っているのはすごく不安定で何かと何かのあわいみたいなところ、という実感があったかもしれません。それこそこの浮遊する紫の物体みたいにふんわりとした感覚なのですが。

N「震災直後はみんな“日常がつねではない”ってことに気づいていたと思う。だからかえって年月が経ってこの本が世に出ることになったのはよかった」

Y「私は本の入稿直前に初めてステートメントを読んで、『そういうことだったのか……』と、とても納得して」

N「最初、写真を見せて説明しようとしたら『黙ってて！

N「後半はやっぱり暗闇で光をつかんでいる、という世界」

Y「途中から二色印刷になるのは永瀬さんのアイデアなんですが、もともと抽象的な写真がさらに抽象化されて、イメージだけが浮き上がってくるような流れにできて。写真展でそれぞれの写真を見たときに漠然と感じることが、ページをめくることでさらに深く伝わるような構成になったかなと思います」

N「地上にはない惑星感を出したくて、『NASAっぽく』っていうキーワードとともにアメリカ・ヒューストン航空宇宙局から引っ張ってきた宇宙の光の画像を渡したんです。

いま、作品から感じてるから!!』って言ったよね（笑）」

Y「そうでしたっけ？（笑） 特にぐっときたのは『導き手のいない新しい場所に足を踏み入れたときの瞬間を描きたかった』という文章。希望がある言葉だし、自分もとりあえず踏み込んでみる、ということをできる人間でありたいなと」

N「私にとってはそれはもう現在完了形で、実は作品として世に出したら、自分は実はもう次のステージにいる」

——写真集は、砂の世界と、夜の世界の二部構成になっています。これはどういう構想だったんですか？

一回目に出してくれたのがイメージと遠い渋い色だったから『もっとNASAっぽく！』ってお願いした（笑）」

——永瀬さんは宇宙がお好きなんですね。前回の「FOLLOW UP 追跡 -JOO2E3-」もそうでしたし。

N「父親が宇宙開発の仕事をしていて『かっこいいなぁ』と思ってたんです。現実的な物理学の世界だけど、ロマンがあって素敵だなぁって。おじいちゃんは飛行機の設計士で、まさに『風立ちぬ』の世界。おまけに母親は客室乗務員だし、空もですが、飛んでいるものの疾走感への憧れが強いかも」

# “SPRITE” by SAYO NAGASE

## 永瀬沙世×米山菜津子 対談
## 「導き手のいない新しい場所に足を踏み入れたときの瞬間を描きたかった」

photo: Takehiro Goto
interview & text: Chiho Inoue

16 07/13 UPDATE

——永瀬さんが一見不思議そうに見えるけど実はロジカルなのは、理系のDNAなのかな。そしてクライアントワークと作家としてのアプローチが違うように見えるのですが、永瀬沙世のA面とB面みたいなものはありますか？

N「そう、全然違う。クライアントワークはゴールがあるからキーワードをもらって、そこに向かって突進するだけ。でも今回のような作品はゴールがないという前提なんですよね」

Y「ゴールがないけど手探りで……」

N「そうそう、雲をつかむような感じ」

——どちらも“偶然撮れた写真”にない力強さがあります。

N「偶然を手繰り寄せているんだと思います」

Y「言葉として組み立てられてはいないけれど、構築的ですよね。ご自身で遺跡つくってますからね。すごいです（笑）」

N「A面は人に求められている部分。もともと変なことしていたのに、『女の子を可愛く撮るの上手だよね？』っていう依頼が増えて場数を踏んでどんどん写真もうまくなり、周りが喜んでくれて嬉しかった、みたいなのがA面なのかも」

Y「A面でやっていたことがB面に作用したりしますか？」

N「写真に関してではないけれど、人間関係はある。A面の仕事をしていて出会う人の中に、言葉の端々や、ちょっとしたときのものごとの対応の仕方でその人が見えてきて、それがどんどん積み重なっていって、この人はコアなところで信頼できるという魅力的な人に出会える。出会いがA面の魅力の一番大きなものですね」

——ところで。タイトルの「SPRITE」はどこから？

N「これがなかなか出てこなくて。スピード感やリズム感、ふわふわじゃなく、芯の強さや光の柱みたいなものをイメージして、類語辞典を買って30,000語ぐらい読みました」

Y「すごい！ SPRITEはフェアリーというよりも精霊、とくにいたずらっ子みたいなニュアンスがあると聞いて、タイトルの書体を選んだんです。いまスピード感と言っているのを聞いて、改めてぴったりだと（笑）。響き自体にもスピード感がありますね」

N「語源はラテン語で“spirit（スピリット）”ってネイティブの友達に教えてもらって、その言葉の成り立ちも面白いなと」

Y「可愛げに見えるけど芯がある」

N「一筋縄ではいかないぞと。ここに至るまですごく考えているのに、そういう感じに見えなくていいよね。深刻さは出さない。けど、文章（ステートメント）は常に真剣」

——米山さんのつくる本は、物として愛着が持てるような個性がありますよね。『GATEWAY』も、それこそ永瀬さんが創刊号の表紙を撮った『RDV』も読みやすく美しいけど「普通にはしたくない」という意思が感じられるというか。

Y「とはいえ、ここ工夫してます！ と声高なものが出来上がるのも嫌で。手にとったときに本の内容が最大限伝わるために密かに仕掛けをして、あとの要素は削ぎ落すようにしています。シンプルだからといって誰がやっても同じようにならないように裏ではいろいろやっていたりもしますが、見る人にはそう見られる必要はないというか『あ、いいかも』って思われるぐらいでいい」

N「そこが一緒なんだ。めちゃくちゃ掘り下げているのに」

——おふたりとも、そうやってさらりとしているように見せかけて、実はすごく精力的に発表し続けていますよね。

Y「永瀬さんは写真集7冊目ですからね（笑）」

——表現者であるということに対する責任感というか、使命感みたいなものってあるんですか？

Y「私は自分を表現者だとは全然思っていないんですけ

それって実は不安定になることだけど、そのほうが楽しいのかもしれない」

N「そう。なんだろう、すごいドキドキしてるのは……」

ど、昨日と今日は同じじゃないじゃないですか。昨日いいと思ったものを明日いいとは思わないかもしれない、ということに敏感でいたいなと思っています」

N「菜津子さんはちゃんと全部、自分に確認作業をしてるよね。そこは私と違う。一回一回止まって落とすところが偉い。私はピューッと飛んでいってしまうけど」

Y「そこは“フィニッシュする” 役割だからかもしれないですね。永瀬さんから写真を受け取ったあと、私がピューッとどっか行っちゃったら、本が出来上がらないので。そして本が納品されるまではドキドキしてます」

N「私は誰にも頼まれてないけど、『やるしかない！』って思うの。欲望なのか、これを使命感っていうのかよくわからない。みんな日常で気づいてもフタをしちゃうことってたくさんあって、大人になるにつれて大事なことをどんどん忘れちゃう。私がやってるのは、それを見つけちゃったからには世の中に出そう、みたいなこと。この感覚にフタしないでおこうっていうコントロールは必死でしているかも」

Y「いまフタしたなって気付いたら開ける、みたいな？↗

Y「この作品を世に問うてるわけですから当然ですよ」

N「出来上がった時点で作品はもう自分から離れているから、シンガーソングライターが自分の曲歌いながら泣かないのと一緒であっさりしているんだけど……。どういうわけか、作品を受け取る世の中や友だちに対して、みんな生まれてきてくれてありがとう！ みたいな気持ちです（笑）」

---

**「SPRITE（スプライト）」**
Yomogi Books刊
297×205mm／80ページ
edition 400部
4,500円＋税
yomogibooks online shop

＊ただいま代官山 蔦屋書店では、写真集とオリジナルプリントを販売する『SPRITE』フェアを開催中（〜8月7日まで）。

---

**永瀬沙世（ながせ・さよ）**
1978年兵庫県生まれの写真家。雑誌を中心に活躍する一方、作家としてこれまで7冊の写真集を制作。「PINK LEMONADE」「Asphalt & Chalk」はパリを拠点とするLIBRARYMANから出版。2016年夏、2年ぶりとなる写真集「SPRITE（スプライト）」を発表したばかり。
http://www.nagasesayo.com/

---

**米山菜津子（よねやま・なつこ）**
グラフィック、エディトリアルデザイナー。女性誌や広告のアートディレクションを手がけるデザイン事務所勤務を経て独立。YYY PRESSという出版レーベルを運営し、写真、文、イラストなどで織りなすオムニバス書籍『GATEWAY』を発行している。
http://yyypress.tokyo/